

---

# 異世界でベタに生きる

じゃがいも畑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界でベタに生きる

### 【Nコード】

N5412Z

### 【作者名】

じゃがいも畑

### 【あらすじ】

突然、異世界に飛ばされた主人公が、がんばるお話です。

## 1 (前書き)

拙い作品ですが、宜しくお願いします。

理不尽ってやつは、本人は別に何か悪いことをしたわけでもないのに被るものだ。

親に暴力を受けたり、学校でいじめにあったり、通り魔に突然殺されたり…。

平和な日本でだってこれだ、発展途上国や人権のない国なんてもっとひどいことがあるだろう…。

そしてやっかいなことに、理不尽ってのはどんなに自分の正当性を訴えたり、悲劇を嘆いても、向こうから消えてくれたりはしないし、ひどい時なんか、何もすることができないままこっちが潰されてしまふときだってある。

まことに憎らしい事象だ…

ホントに憎らしい…今まで、そんなに理不尽なことと相對したことがなかったからか、余計にそう思える。

俺は今、森の中に立っている…何の前触れもなく、いきなり森の中に立っている…立派な木が乱立してるせいか、太陽の光はかるうじで届く程度のように薄暗い…そして、ちよい寒い…

空気のうまさ尋常でない点からしてもかなりレベルの高い森なのだろう…シシガミ様とか出そうだ…

さて、ではなぜこんな高レベルな森に俺はいるのだろうか…と考えるだけでも答えは一向に出てこない。

なんせ5分前まで池袋にいたのだ。

ホントにフと気づいたらここにいた…そんな感じなのだ。

その証拠に服装は制服（夏服）、カバンは通学用のスポーツバッグという装いで、自分が池袋の繁華街を歩いていた時のまんまである。

「はあ…どろろなってんだ…混乱しすぎて脳ミソ破裂しそう…うがぁ  
あぁあぁあぁ！」  
俺は頭を抱えながら咆哮し、そのままその場でフリーズした。



しばらく闇雲に歩き回ってわかったことは、人の手が加わっていない大森林を歩くのは意外と大変で、比較的歩きやすい道を選んで歩いているとはいえ進むスピードが遅いってことだった。

じれったい思いに歯噛みするが、焦っても仕方ないと自分に言い聞かせさらに歩く。

「不幸中の幸いなのは、虫や小動物がわんさかいるってわけでもないってところか…それでもこの環境で野宿は絶対したくないな…」

とひとりごちていると、少し先の方からわずかだが水の流れる音が聞こえてきた。

急いでそっちの方へ進むと、陽の光が射し込む岩場が現れ、なだらかな流れの幅3メートルくらいの川を見つける。

「とりあえずこっからは川沿いを下流に向かって進もう…釣り人とかに会えるかもしれないし、村とかあるかもしれないしな…」

なんとなく希望が見えてきて多少、安堵する。

小休止した後は再び歩き出す。先ほどまでとは違い視界良好な岩場は移動しやすく、草や枝を掻き分けたり、虫とかをそこまで注意する必要がないため、逸る気持ちも重なつて小走りで移動する。

陽が傾き木々や川がオレンジ色に染まる頃、ようやく河原になっている場所に出ることができた。

周りの木もそこまでデカいのはなくなってきたいて、もうちょっとで森は抜けられるかもしれないな…という感じになってきた。

ここまでで大体、5時間…携帯を確認してみても初めて気づいたが、全然疲れていない…いくら俺が柔術やら柔道やらをやっているからって、見知らぬ森で5時間も動きまわって疲れ知らずとかありえねえ…身体能力が上がってる…？いやいやありえないだろ…  
というところまで考えていたところ、「ぐうぐう」という腹の音が聞こえてきて、考えるのをやめた。

どう考えても答えが出ないことより、一先ず目先の危機についてだ。周りを見ても石、川、森しかないうえ、飲料水や食料はもちろん、ライターやナイフもない。植物やサバイバルの知識は浅いものならあるが、所詮キャンプレベルで全然信頼できない…。

さてどうしたもんか…ひとまず夕暮れを迎えている今、いくら河原で見通しがいいとはいえ、暗闇の中をここで一晩過ごす勇氣なんてない。

「携帯の電池はまだあるし、（携帯の）カメラのライトを頼りに夜通し移動するしかないな…疲れにくくなってるみたいだし、なんとかなるだろ…」

そう決めると、とりあえずジョギングレベルのスピードで下流へと向かう。

「がんばれ俺…」

「暗い…果てしなく暗い…マジかよもお…ふざけんなよ…」

心が折れそうになるくらいの闇が周りを包んでいる。

正直、舐めていたとしか言えない…暗すぎるぜ大自然…（涙）

月の光とカメラのライト…そして闇に目が慣れてきたとはいえ、現代日本の申し子である俺にはちょっとありえない暗さだ…

だがまあ…静寂さは漂っているが、無音でないことには助かってる…川の流れや風の吹く音、虫の鳴く声…鳥や獣の鳴き声には結構ビビるが、これにも結構慣れてきた。

音があることで、警戒することを忘れないでいれるし、正直、自分以外の生命を感じることで、恐怖と同時にある種の安心感も得れる。そんなことを考えながら、慎重に河原を移動していると、さっきまではなかったある異変に気づく…

「視られてる？」

そう感じた瞬間に周りを見回す。

森側、木々の隙間を「サツ」と何かが移動したのを視界の隅で捉える。

背中からドツと冷や汗が出てくるのがわかる。体温も急に下がってきた…

マズイマズイマズイ…「敵」かもしれない…どうする…戦うか？

いやいやありえないだろ…対人戦ならまだしも…

敵は多分動物だ、こんな暗闇で襲われたらひとたまりもない。

ひとまず全速力で逃げるということしか思い付かない。…っという  
か、逃げ切る以外の事態を考えたくない…

よし…行くぞ…「ダッ！」

と駆け出す。

足場が悪いし暗闇なのもあるしで全然スピードが出ないが、そんな  
のは百も承知！とにかく全力疾走しかないんだよ！！

しばらく泣きながら走っていると、森の中から「カサツカサツ」と  
いう音が聞こえてくる。

ヤバイ…並走してきている…しかも、こちらが向こうに気づいたの  
を察知したのか、仲間を呼んだらしい…数が増えている。

恐怖で大声をあげそうになるのを抑え、どうするかを必死に考える。

敵はまだ襲ってきていない…ということは向こうはまだ体制が整っ  
ていないか、こちら側の何かを警戒しているってことだ。

前者なら整い次第、後者ならこちらが今の状態を変化させたら襲わ  
れる…

どうするどうするどうする…ある程度までは考えられるが、恐怖や  
ら焦りやらで対応策を考えることができない。そしてその事実になら  
に焦る…

そんな状態で河原を全力疾走し続けられるわけもなく、案の上、「  
ガッ」という音と共にコケる。

「ぐっ…」

なんとか受け身はとったが、痛みが身体を駆け巡る。だがそんなこ

とに頓着している暇はない。  
急いで立ち上がらなきゃと思ひ顔を上げると…

「おいおいマジかよ…」

すでに俺は何かにつままれていた…川を背後にして、半円に、大体1  
0体ぐらいいる。

恐る恐る、携帯のライトを周りに向けると…

俺の頭の中は驚愕の一色で染まった。

そいつらは二足歩行だった……

緑色でデコボコした体表、120〜130cmくらいの身長、ぷっ  
くり出た腹と細い手足、潰れた輪郭にくちばしのように飛び出た鼻  
と口…

完全に化け物だった。

「カツン」という音がした。

携帯が手からこぼれ落ちた音だ。

光が途切れることはなかったが、本当ならすぐに拾うべきだろう。  
だけど俺にはそんな些末なこと、どうでもよかった。

「な、なんだよこれ…どうゆうことだよ!…」

俺はもう駄目だった。これまで抑え込んでいた恐怖や不安に支配さ  
れ、身体は震え、携帯もその場に落とし、完全に我を忘れた。

「ふざけんな!なんだよこれ!どういうことだよ!ふざけんなよ!  
!」

四つん這いで、両手を地面に叩きつけながら…  
泣き声にも怒声にも聞こえる声で…

涙も鼻水もダラダラ流れ流しながら俺は喚き散らした。

「ぎゃははっ」

「きいはは」

「きいーきいー」

俺のそんな惨状を嘲るようにその化け物達は声をあげた。その目は完全にこちらを見下しており、口は下卑た笑みを浮かべている。

だが、一匹の化け物が手に持ったポロボロに刃こぼれした剣をこちらに向けると雰囲気が変わった。

目には殺気を孕み、元々猫背だった体勢をさらに前傾にし、今にもこちらに飛びかかっているといる。

喰われる…

そう感じた…

その瞬間、10匹の化け物が各々の武器を振りかぶりながらこちらに飛びかかってきた！！

俺の心も身体も恐怖に固まった。

こんなわけのわからないところで、こんなわけのわからない化け物に殺されて喰われる…

数秒後に訪れる凄惨な情景を思い浮かべ、俺は生きる気力を失った

……



「ふん、所詮、お主はその程度の男じゃったか…」

気が付いたら全力で横に飛び、河原をゴロゴロ転がっていた。

心に怒りが吹き荒れる… 身体に熱が蘇る…

あの日誓った言葉が脳裏に響く…

「うつせえんだよ！くそじじいが…」

立ち上がる…立ち上がれる…あちこち痛いし、頭から血が流れているけど、今はこれぐらいが調度いい。

「この俺が、生きることが諦めるとかどんだけだよ…修練不足だな…クソッ」

そう吐き捨て、心を鎮める…

身体の隅々まで力を張り巡らす…

肚で息を吸い、吐く…

心を…身体を…戦闘のそれに変質させていく…

敵が人型でよかった。

人型であるのなら自分が持つ技も有効だ。

静かにゆっくり構えをとる。

「きいいい…?」

化け物の武器は俺のスポーツバッグをズタズタにはいたが、俺自身には一太刀も当たっていなかった。

その事実が、よっぽど不思議だったのか、一匹がリーダー格に何かを問いかけている。

問いかけられた化け物も一瞬、呆けていたようだが、こちらに向き直り、改めて、

「キイキイ！キガアア！！」

と己の持つ武器をこちらに向け、喚いている。

それを合図に残りの9匹がこちらに襲いかかってくる。

俺と奴らの間合いはおおそ7、8m…

向かってくる化け物の集団に隊列というものはなく、思い思いにこちらに向かってくる。

駆けて来る奴が5…

飛びかかって来るのが4…

俺は足に力を籠め…一気に空中にいる真ん中2匹の間に飛び込む  
右手と左手で各々の顔を掴み、そのまま空中から地面に後頭部を叩きつける

「グチャツツ」という音と、両手に伝わる感覚に囚われないよう意識し、振り返り際に一番手近にいた2匹の足元を目掛けて、右足の蹴りを放つ…

足を払われ、浮いた2匹の頭上に俺は跳び、思いきり踏み潰す。

これで残り6匹…

前方左に2、右に3、背後に1。

まずは左の2匹へ向かう。

この時点でやっと自分達が攻撃されていることに気づき、2匹はこちらに向き直り、攻撃を仕掛けてきた。だがもう遅い

1匹目には何もさせずに、大外刈を懸け、後頭部を地面に叩きつけ、潰す。

もう1匹はナイフによる刺突を仕掛けてきたが、半身にして避け、突き出してきた相手の右手首を左手で取り、大腰の要領で地面に投げ飛ばし、仰向けになった相手の剥き出しになった喉に向かい、思いきり拳を叩きこんで潰す。

すでに背後から3匹が迫っている。

振り向き様に立ち上がり、一番左に位置している1匹の懐に飛び込み肘を鳩尾に入れる。くの字になったそいつの首に腕を回し、首投げをしながら折る。

残りの2匹が持つてる手斧を叩き込んでくる。

一方は頭上から、一方は俺の右から横薙ぎに両者の武器を持っている手首を掴み、横薙ぎに武器を振った方に支え釣り込み足の要領で、体重移動と右手のひねりを利用し、転ばしながら背中から地面に叩きつける。

それと平行して左手で捕まえた手首を引き寄せ、一本背負いで相手を頭から地面に叩きつけ、潰す。

仰向けで寝転んでいた残った一匹の首に拳を叩き込んで、こいつにも止めを刺す。

残りはリーダー格の1匹だけだったが、周りを見回してもどこにもいない…

どうやらとっくの昔に森へ逃げていたようだ。

俺は緊張の糸が切れ、仰向けに倒れ込む…

「ふう〜…見たかクソツタレが…」

そう呟き、ちよっとだけ休憩をとることにする。

「スウウウ…ハアアア…」

俺は一度深呼吸をすると起き上がり、周りをもう一度確認した。

携帯電話の光でぼんやり照らされているその場所に向かい、それを拾う。

次にスタボロにされたバッグの状態を確かめる…までもなかった（苦笑）

柔道着と帯以外はここに捨てていくしかないな…

中からその2つを取りだしボロボロの柔道着を折りたたみ、奇跡的に損傷の少ない帯で結ぶ。

つとそこまでしてようやく気が付いたのが、自分の状態だ。

所々にこびり着いている血や肉片…それを認識した途端、胃の中から何かが逆流するのを感じた。

急いで川まで走り、そこで思いきりぶちまける。

少しして落ち着いたら、川の水で口を濯ぎ、手を洗う。血が多く着いているシャツの匂いも気になったので、その場で脱ぎ、簡単に水洗いした。

そうこうしているうちに、頭も働き始め、さっきの化け物どものことや、今いる場所のことについて考え始める。

「マジでここ、どこなんだ？あんな化け物がいるなんて聞いたことないし、それにあの剣やナイフ…日本にポンポンあるようなもんじやないぞ…」

色々浮かんでは消えていく思考に俺は混乱を増していく。さっきまで落ちて着いていたはずなのに、また発狂しそうなほど不安や恐怖がせりあがってくる。

そんな自分に気付き、一旦深呼吸をして落ち着かせる。

風の音や川の音を聞くことで心を鎮める努力をする。

未熟だな…つくづくそう思う。

だけど今はこうやって自分を保つしかないのもまた事実だ。

情けないが、これしかない…とにかく突き進むしかないんだと自分に言い聞かせる。

そうやってやっと落ち着くことができたら、次の行動について考える。

と言っても、今の状態じゃ取れる選択肢は全然ないよな…とりあえずこの森を出て、人を見つけること…簡単だけど、そんなところが目的も定まったので、さっそく移動することにする。

「改めて見ると、この場に留まってること自体が危険だったな…血の匂いがたちこみすぎてる」

頭も働き、心が落ち着いてくると、様々な感覚が鋭敏になってくる。

そして自分が奪った命の感触も蘇ってきた…まあ…あの場合は仕方なかったよな…今さら後悔しても遅いか…  
そう思うことにして意識を切り替える。

気のせいかなにやら複数の気配がこちらを伺っている気もするので、早々に移動を開始する。

再び携帯の光を頼りに夜の河原を下る。  
環境に慣れたのか、多少の空腹と渴き、疲れを感じるが足取りは  
まだ軽い。

そう思いながらしばらく移動していると、空も明らんできた。

「あっちから太陽が昇るってことはあっちが東なのかな……」  
などと呟きつつ、さらに移動していると……

「あっ！」と思わず声をあげてしまうほどの光景が目の前に広が  
った。

そこには広大な湖が広がっていた。

河口付近が森の出口のようで、湖の向こう側は草原のようになって  
いる。

ちょうど俺が歩いてきた川に対して湖を中心にYの字でさらに川が  
流れているようだ。

ひとまず森を抜けた安堵感が半端なく、思わず「いやっほーい」  
と叫びながら湖の外周を走ってしまった。

ひとしきり、はしゃいだ後に「結局、水も食料もないし、死ぬ一歩  
手前なのは変わらないな……」という事実にあきづくまで……

1時間ほどで休憩と仮眠を済ませたくらいに、携帯の電池が切れた。

ここまでよくがんばってくれたなあ……という感慨と、このまま夜に

なったらマジでやばいという不安が同時にわき上がる。

まあ、いちいち不安がってもキリがないし、とりあえずどっちに進むかを決めるかな…

もちろんどっちの川づたいに行くかってこと…だが…

「ん？あれは…？」

俺の視界が上空にあがるあるモノを捉えた。

俺が見るのは今まさにどっちに行こうか迷っていた川の一方の先であがっている白いモヤだ。

あれは…煙り？もしかして人がいるのか？

逸る気持ちを抑えながら、柔道着片手にそちらに向かって走る。

Yの字の左の川沿いを10分ほど走ったところで少し先に人影が2人、たき火を囲んで座っているのが見えた。

俺はもう、うれしくてうれしくて仕方なく、大声で「おい、おい！！！」と呼び掛けながら、右手をブンブン振った。

その2人はすぐ俺に気づいたようで、立ち上がり、一方は槍を、一方は短剣を2本それぞれ両手に持ち、こちらに向かって構えをとる…そして…

「とまれ！！それ以上近づくな！！！」

と…つてええええええ！？まさかの威嚇！？

いやいやいやいや、なんで！？なんでそうなるんすか！？  
つと驚愕しながら俺はその場に足を止める。

「あのーすいませーん！俺、一般人でーす！遭難者でーす！助けてくださーい！」

だいたい、6、70メートルぐらい先にいるお二方に、俺は必死の救難信号を送る。

そんな俺に対して全然警戒を緩ませることなく、2人組の一方が俺に声をかけてくる。

「お前、どこの種族の者だ？ハーデスか？なぜあの森の方から現れた！？冒険者ならギルドカードを見せろ！！俺達に近づいてきた理由はなんだ！？」

いやいやいや、何言ってるのあの方！？しかも質問の数多いよ！？そんな悪いことしたか俺！？

「ちよちよつと待ってくれよ！！あんたが何言ってるのか全然わかんないんですけど！！とりあえず俺は単なる善良な遭難者なんだよ！！いきなりあの森にほっぴり出されて、命からがらやつとここまでたどり着けたんだよ！助けてくれよ！見ればわかるだろ！？武器どころか飲み水もないんだぞ！！」

と叫び、俺はその場で両手を挙げながらグルツと回った。

すると向こう側で何やら話し合いが始まったようで、俺はポツンとそれをしばらく眺める羽目になった。

こりゃダメかな？と泣きそうな気分になってきた頃、何やら結論が出たようで、2人がこちらを向く。

「わかった。とりあえずゆっくりこちらへ来い！！その代わり、少

しでも妙な仕草をしたら……わかってるな!!」

「え?…あ、ああ……わかってる」

よっしゃあつっ!!」

ああよかったあ……これでまたこんなところに置き去りにされたら洒落にならなかった……(涙)

ホントよかったあ……

俺は胸の内に込み上げてくる安堵を痛いほど感じながら、(たぶん)  
恩人2人になつてくれるであらうに向かつて歩いていった。

## 6 (前書き)

拙い作品ですが、よろしくおねがいします。

俺はオタクではないと自負している。

それは決して彼らを否定的に見ているからではなく、どちらかというど敵わないというある種の畏怖の念からきている。

とはいえ、一般人であるかと言えば、それも微妙だ。

マニアックな漫画も読むし、ライトノベルも読む、アニソンで熱くなれるし、アニメやエロゲーで泣いたことだってある。

だが、オタクほど収集物も持ってないし、知識もない、イベントとかにも全く行かない。

つとというかかなり中途半端でどっちつかずな奴なのだ。

つまりまあー何が言いたいかというと……「そういう知識」がある程度実装されているのが俺だということだ。

そして、そんな俺だからこそ半ば確信を持ちつつも否定し続けているたある考えがある。

「ここ……異世界じゃね？」

まあー昨夜襲ってきた化け物ではほぼ確定っちゃー確定だったんだが、中途半端な俺としては、それを受け止める勇気が全くもってなかったんだ……

だがしかし……

これを目の前にしてしまったらもう駄目だ……

いくら俺でも諦めるしかない……

「い、犬耳と猫耳……」

俺の目の前にはたぶん獣人と呼ばれる方々が2人いる（涙）

「何か言ったか？」

槍を構えたままそう問いかけてきたのが、犬耳の方だ。どうやら男性のようだ。

こちらへの警戒心が丸出しすぎて俺の心が折れそうだ。たぶんさっきまで大声張り上げていたのもこいつだろう。

もう一方の猫耳の方は、短剣を逆手に持ってはいるが、腕は下ろして自然体だ。

身体つきや鎧の形状からも女性だとわかる。結構美人だ。

2人とも、顔つきがなんとなく犬っぽいとか猫っぽいというだけで、単純に犬や猫が二足歩行になっているというわけじゃない。体毛とかは服やら鎧で確認できん。

俺がボオーツと2人を観察していると。

「んでお前、何者なんだ？なぜスプリガンの森から歩いてきたんだ。」

犬耳が俺にそう問いかけてくる。

さて、なんて答えよう……

正直に異世界から来ましたとか言ったら状況が悪化しそうだ……まあーベタだがこれしかないだろう。

「実は俺、記憶がないんだよ。覚えてるのは名前だけで、さっきもちよつと言ったけど気づいたらあの森にこれと一緒にほっぽり出されてたんだ。」

左手に持った柔道着を持ち上げながら、胡散臭いことこのうえないセリフを吐く俺（苦笑）

案の定2人とも訝しげな表情をする。

そして犬耳の方がなんか言いかけた時

「ルー、相当怪しいけど、嘘を言ってる風でもないわ。ここはまあ助けてあげてもいいんじゃない？こんなボロボロの子を見捨てるのも後味悪いじゃない。」ルー（たぶん犬耳のこと）の左肩に手を置きながら、猫耳の彼女がそう言った

め、女神だ……

俺が両手を合わせ、ひざまづいて感謝しそうになったとき、彼女はこちらに視線を合わせ

「あんたも、自分が相当怪しいのくらいわかるでしょ？大人しくしてれば近くの村までくらいは連れてってあげるわ。でも、肝に銘じておきなさいよ？なんか怪しいことしたら容赦なく殺すからね？」

「……りよ、了解っす」

俺は涙目でうなずくほかなかった。

その返事に不承不承といった体だが、一応納得してくれたようで、ルー君もずつと俺に突きつけていた槍を下ろしてくれた。

「さあ！そうと決まったら朝ごはん食べましょ？あなたももちろんいるでしょ？」

待ってましたこの時を！！

実は彼女達の後ろで刻一刻と鍋に入ったスープ的なものがグツグツいつていて、すきつ腹には罪な匂いをさせているのだ。

俺は、心の中でガツポーズをとりながら

「はい！いただきます！！」

と返事をする。

そんな俺を尻目に食事の準備にとりかかる2人。

この世界に来て初めての食事に胸を踊らせつつ、2人へ手伝いを申し出るのであった。

## 7 (前書き)

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願ひします。

朝日が昇った草原地帯を草花と踊るように爽やかな風が舞い踊る。緑の色彩鮮やかな大地に、一筋の清流が駆けている。なだらかな白藍が奏でる音と川面を撫でる風の音律は、聴く者全ての胸に、安らぎを運ぶことだろう。

俺は今、激しく掻き乱されていた……。

俺の目の前でたゆたう湯気と香りに……そして、それを生み出している一杯のお碗に満たされた豆スープにだ！！

「う、うますぎるうううう (涙) こんなにうまいメシを食ったのは初めてだああああああ」

朝の草原に俺の叫びがこだまする。

「お、大袈裟ねえ…… (汗) ほら、こっちは冷たい水ね」

カップを渡されてすぐ、俺は一気にそれを飲み干す。

「くうううううんはああ！！うまい！！最高だ！！」

「そ、そう……」

2人はかなり引いているが、そんなのおかまいなしだ。

俺は今、生きていることを実感している最中なのだから……！！

そのままスープをかきこむようにして飲む！味は薄いし具は豆だけだが、色んな意味で極限状態だった俺には、温かいスープが胃やら心やらに染み通った。

おかわりをもらい、それを全て胃に納めると、やっと人心地つけた。ああ……頬を撫でる風が気持ちいいなあ……

「いい顔しているところ悪いんだけど、片付け手伝いなさいよね！ほら、食器とお鍋、川で洗ってきてよ。それが終わったら準備して移動するわよ。」

「え……あっはい！すいません」

渡された鍋やら食器を抱えて川の方へ向かい、ジャバジャバ水洗いを始める。

「しかし異世界かぁ……どうすっかなぁ……帰りたいけど、世界間の移動とか個人がどうこうできるレベルの問題か？俺には螺旋力も天使の落とした白金の本もないんだぞ……」

アニメやらマンガやらラノベやらでは珍しくない異世界への移動も、自分に起こるとその果てしなさの前に愕然とする。

「なにこの無力感……くつがえしようがなさすぎて逆に平静でいられるわ（苦笑）」

ファンタジーものではよくある何かしらの超常的な力も今のところ全然顕現しないし、どうせーっちゅうねん……泣けてくるわ！！

なんとなく関西弁で現状を嘆いてみたところで、洗いものも終わる。

洗ったものを抱えて、2人のとこまで戻ってくると、すっかり準備

が整っているようだった。

「遅いぞ、皿洗うだけでどんだけ時間かけてんだよ」

イラツときたが、ここは我慢我慢……なんせメシまで食わしてくれて、なにやら近くの村まで連れてってくれるという恩人なのだ……

「す、すいません……ちょっと考え事してたもんで……えへ、えへへへ」

「ルー、つかかかないの！ありがと、鞆にしまつからちよつとそのまま持ってきてくれる？」

と言うと、猫耳さんが鍋から順に自分の肩から提げている鞆にポンポン入れていく。

……ふむふむ

まあーね……

いやいや、わかってましたよ？うすうすだけどさ……

だってまあー異世界で怪物や獣人さんがいるわけでしょ？

しかも獣人さん達つてば槍やら短剣やらを装備して、（多分だけど）皮の鎧で上半身を覆っているという戦士ルック。

もはやここまで王道ファンタジーなら、例のアレがなきゃ、もはや成立しないって感じですよ。

「あ、あの……そのバッグつてもしかして魔法？的ななんか特別な力が掛かってたりします？」

そうなのである。先ほど鍋やらお碗やらを入れたバッグ……奴は一見するとちよいファンキーな皮のショルダーバッグって感じなのだが、どう考えても鍋と3人分の食器は用量的に入らない大きさなの

である。(横×縦＝30×20ぐらいかな?)

「ああこれ?そのマホウ?つてのはよくわからないけど、確かに神術が施された特別製ね。心力しんりょくを定期的に込めて、術が解けないようにしてれば、物が無限に入るバッグよ。結構高いけど人気の品だし、初めて見るのも不思議じゃないかもね。つてそういえばあなた記憶がないんだっけ?」

やべ……この世界じゃ常識的なことなのかやっぱ……ここは勢いでなんとか押し切るしかないな。

「そ、そうなんですよ!なんか記憶が曖昧で!!やべえなあ……頭でも強く打っちゃったかなあ……あは、あははははははは」

「そ、そう……あなたも大変ね……」

くっ……ごまかすためとはいえ、このドン引きされてる感じと、憐れみの目は心にめっちゃ刺さるな(涙)

「おい!そろそろ行こうぜ!」

なんとなく気まずい雰囲気が漂った俺と猫耳さんだったが、ルー君のその一声に助けられ、そちらに向かう。グッジョブ!ルー君!

「ごめんごめん!さっ!あんたも行きましょ?村までだから短い間だけど、よろしくね!」

ウィンクと共に向けられたそのセリフに一瞬ドキドキしてしまいな

から  
「こちらこそよろしくお願ひします。」

と俺も一礼して、その2人について行く。

「足手まといになるなよ」

大丈夫……村までの我慢だ……

## 8 (前書き)

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願ひします。

見渡す限り草原である。

所々に木が生えていたりするが、ほとんどが足首くらいまでの草花で地面が敷き詰められている。

こういう風景、やっぱり新鮮だなあ……とシティ派な俺は感じる。風もうまいなあ……

いやいや……なに観光気分でちよい癒されてんだよ……異世界だぞ！観光どころか、遭難してんだよ！

はあ……異世界かあ……落ち込むわあ……

まあでも、全く希望がないってわけでもない。

さっきなぜか焦って記憶喪失キャラを押し切ったせいで詳しく聞けなかったが、どうやら「しんじゅつ」とかいう魔力的な力があるようだ。

世界間の移動なんてファンタジーな現象に、その力が無関係とは考えにくい。

すぐにはどうにかできないだろうが、この世界でとりあえず生き残って、その力について情報を集めれば、帰る目処もたつかもしいかない。

というところまで考えて、「フツ」と笑ってしまふ。

決して楽しいことばかりあったわけじゃないし、不満やらなんやら

あの世界にはたくさんあった。ほぼ毎日文句を言っていたし、恨んだことだってあったはずだ。

それなのに、なんだかんだでやっぱり帰ることは諦められない。まだやり残したことが向こうの世界には山ほどあるのだ。

改めて思い返すとやはりあの世界の日本という国が、そして自分を待つ人たちがいるあの場所こそが、自分の故郷なんだな。と強烈に意識してしまう。

そんな郷愁の念と、そこへなんとしても帰りたいという目的意識がはつきりすることで、心と身体に熱が籠っていくのがわかる。

それにまあ、この世界で生き残ることが修行になるかもしれない。強くなるための糧だと思えば、大概のことは苦ではないと思えるだろう。

うん、決まったな！

最終目標は帰ること。

そのためこの世界で情報を集める。

そして、強くなる！！

まあーこんなところか。

我ながら単純すぎるが、わかりやすく大変よろしいだろう！

さてと、んじゃひとまずこの世界の常識を知ることから始めますかな。

猫耳さんならまあある程度は教えてくれるだろ。村とやらに着けば当分会うこともないだろうし、形振りかまわず色々聞いてみるか

な。

俺たちは今、逆三角形の配置で歩いている。ちなみに前方右が猫耳猫尻尾、左が犬耳犬尻尾である。

猫尻尾は手触りの良さそうな毛並みでニョロってる。

犬尻尾はフツサフツサな感じだ。

2人共、後ろから改めて見ると、やはり迫力がある。俺の身長が172cmなのに対し、2人共180くらいあってデカいし、体格もガツシリしている（猫耳さんは無駄な肉がない感じ）。

出来れば一度手合わせしてみたいなあ……  
まあーそれはまた今度だな。とりあえず自己紹介あたりから始めて、色々聞いてみるかな。

「あの」

つと俺が猫耳さんに話しかけようとしたときに、猫耳さんが「そういえば」と呟いて、こちらに目配せしてきた。

なんだろうと思っっていると

「自己紹介がまだだったなーと思っただけ」

「そんなもん必要ないだろ、どうせ村までの付き合いだ」

「まあーいいじゃないの！どうせ村まで暇なんだし！それにルーがムスムスしてるからつまんないのよ」

「……ふんっ」

「も〜。ごめんね、こいつハーデス族の奴とちょっとあってさ、まあー根は良い奴だから気にしないでよ」

「あ、あーはい」と苦笑しながら返す。

「んで、自己紹介ね。私はリン。こっちはルーカスね。」

名字を言わないってことは、あんまり名字は一般的でないってことなのかな。それとも伝えたくないのか……まあー考えてもしゃーないか、とりあえずこっちも名前だけでいい」

「ユウです、よろしくお願いします。」

「別にそんな畏まらなくてもいいわよ（苦笑）私もルーも、しがな流しの冒険者でしかないんだし」

「いや〜さすがに命の恩人に対しては丁寧になっちゃいますよ」

それを聞くと、リンさんは呆れた表情をして

「まあ〜好きにしてちょうだい。別に気にしないからさ」と言ってくれる。

この人さっぱりしててホントいい人だな〜。可愛いし、絶対モテるだろ。

出会い頭に「殺す」発言かまされた時にはどうなるかと思ったけど、無駄に緊張する必要もないな。

「了解です」

俺の緊張がほぐれたのがわかったのか、おどけた感じでリンさんは尋ねてくる。

「あんだ、自分のこととかどんくらい覚えてるの？」  
おっ、向こうから聞いてきてくれたか、こりゃ好都合だな。

「自分の名前とかできることなんかは覚えてるんですが、あとは全然ですね（苦笑）この辺の地理とかはもちろん、世界についても地理やら政治形態やら流通貨幣やら全然覚えてないです。あと、冒険者ってのはなんか組みたいのがあってそこに所属してるってことですか？僕にもなれますかね？それと、ハーデス族？ってなんですか？種族って色々あるんですか？あー、あとしんじゅつ？についても教えてほしいです！」

と早口に捲し立てた俺を見てリンさんが

「ちよつ！ちよつと待って！！いきなりそんなに聞かれても答えきれないわよ！ってか、あんだかなり重症ね……どれもこの世界の常識についてじゃない……」

かなり可哀想な人を見る目だ……だがしかし！めげるわけにはいかないのだっつっ！！

## 9 (前書き)

未熟すぎる作品ですが、よろしくおねがいます。

「はあ……まあここで遭ったのも何かの縁だしね。いいわ、村に着くまでなら質問に答えてあげる。でも、私だって知らないことがあるし、詳しく説明できないものだってあるから、その辺は諦めなさいよ?」

そう苦笑しながら俺の質問に応じる姿勢を見せてくれたリンさんに感謝しつつ、質問していく。

「ありがとうございます。ホント助かります(涙)」

「まず教えて欲しいのが、お二人は冒険者だって言っていましたけど、それって自称ですか、それとも職業として成立してるんですか?」

「まあーギリギリ職業っていいのかなあ…世界政府ってのがあってね、そこが冒険者ギルドってのを運営してるのよ。」

そこに登録すると、ギルドが仲介者になって仕事を卸してくれるってわけ。もちろん登録は誰でもできるし、支部も結構あちこちあるわよ」

なるほど、大体予想通りの仕組みだな。

誰でも登録可能ってのはデカイ。

異世界でいきなり路上生活者になるとかマジ勘弁だし(苦笑)

それに一ヶ所に留まって仕事をするよりも、あちこち周った方が情報も集まるだろうし。

「うーん……僕もその冒険者になりたいと思うんですが、仕事って選べるんですか?一応武術の心得があるんですが、いきなり物凄い怪物と戦うとかは無理だと思っんですよね」

「それが一番無難かもねえ……記憶もない素性の怪しい奴を雇ってくれるとこなんてそうそうないだろうし（苦笑）まあー安心して、ランクつてのがあって最初は一番下のEから始まるんだけど、このクラスは見習い扱いだから、そうそうきつい仕事はまわされないわよ。その代わり報酬も安いけどね」

よしよし、まあー最初は生活が苦しいかもだが、なんとか生きていけそうだな。

「ちなみにリンさん達のランクはどこなんですか？」

そう聞くと、リンさんはニヤニヤしながら振り返り

「私とルーはねえ……なんと上から2番目のAランクなのよー？むっふっふー」

と口を手をあてながら完全な自慢をしてきた。

子供か！！お約束で尻尾がユラユラ揺れちゃってますよー！！

と思いつつも……

「ええええええ！？めっちゃめっちゃすごいじゃないですかああああ！！  
かっこいいーなあお二人とも！！」

日本人の美德を忘れてはいけないよね？まあーホントに驚いてもらえるしね。

「そうでしょー？尊敬してくれてもよいのよー」

むっっちゃ胸張って喜んでる……褒めた甲斐がありすぎるんですけど！

……ん？えつつつ！？

俺はその時、まさかの光景を目の端で捉えてしまっていた……

ルーカスさん……尻尾が左右にめっちゃワッサワッサなつとる……

この人……リンさんの言う通り……いい人なんだな……

ルーカスさんへの評価がグングン上がっていく中、それを表に出さないよう「冷静に冷静に！」と心の中で唱えながら次の質問をリンさんにする。

「高ランク冒険者のリンさんにお聞きしたいんですが、お金の単位と価値を教えてくださいませんか？」

リンさんはかなり上機嫌に答えてくれる

「お安いご用よー！！」  
と言い放ち、例のショルダーバッグから折り畳みの財布を出してきた。

「お金は紙幣っていう種類で3つ、それから硬貨で6つ。単位はネスよ。これが1万ネス、こっちが5千、んでこれが千。硬貨は順番に500、100、50、10、5、1よ」

偶然の一致にビビるな……日本円と色やら形やらは違つが数字の区切り方とか一致する箇所がめっちゃある……すげー覚えやすい……あざっす！

「大体、安宿で一泊5〜6千ネスくらいで、普通のが1万くらいね。

外食するなら一食が大体500〜千ネスクらいから。んで、見習い冒険者が1日で稼げる報酬が大体1万〜1万2千くらいからね」

「それならなんとか毎日、屋根のあるところで寝れそうですねー」

「まあーねえ。でも戦闘系の依頼をこなしたとして、そこまで大変なものはないけど、やっぱりそれ相応の装備を整えなきゃならないし、それを維持しないといけないわけだから、最初は苦勞するかもしれないわね（苦笑）雑費ってのは結構嵩むもんなのよねえ……」

経験者は語る……だな。金のやりくりはその時になってから考えるとして

「この世界の貨幣は統一されているんですか？どっか違う国ではお金が違うとかってあります？」

「大昔はあったみたいだけどねー7部族の首長が世界政府を創設したときに銀行つてのが生まれたのよ。その時に貨幣は世界共通になつたらしいわ」

なるほどな……結構、安定的な体制を作り上げているんだなこの世界。ナイスだぜ！

心の中で誰かに親指を立てつつ、さっき出てきた7部族の首長について聞いてみることにする。

「その7部族つていうのはなんなんですか？」

この質問はしなきゃよかったと後悔した……

なんせ前のお二方共「ピタリ」と歩くのを止め、こちらに振り返り、俺を「じいじいじい」と睨み付けてきたのだ。

そして

「……………はあゝゝ、あなたってホントにこの世界の人間？」

ドキツツツツ

「ななななななな、何言ってるんすかリンさゝん、ああ当たり前じゃないすかあゝ」

動揺しすぎだ俺……

「何そのあからさまな動揺……………ふう……………まあいいわ」と渋々納得してくれたリンさんは、再び前を向き、歩き始める。もちろんルーカスさんもだ。

ルーカスさんは振り向き様になんり困惑した目を俺に向けてきた。

だが何も言わないところを見ると、もはや俺のことは完全にリンさんへ丸投げしたようだ（苦笑）

## 10 (前書き)

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願ひします。

「7部族のことだけど、細かいところまで話し始めるとかなり時間かかるから、はしょって要点だけ話すわね」

どうやらド常識中のド常識を質問してみたんだなあ……そりゃ呆れられてもしゃーないわ……だが負けん！！

ここで聞いとけば、この世界にいち早く馴染めるはず……ってかそう何度も何度もこの心を抉るような視線と雰囲気晒されてたまるかよおおお（涙）。

「よろしくおねがいしまーす」

リンさんは歩きながら左手をパーの形にして肩の横まで挙げ、親指から順に折り曲げ始める

「まず、それぞれの部族名ね。ドラグーン・ウンディーネ・ケットシー・ドワーフ・ライカンスロップ・エルフ・ハーデス。それぞれの大まかな特徴はドラグーンが背中に翼、ウンディーネが両手両足に水掻きと首横の当たりにエラ、ドワーフが低身長に長いヒゲ、エルフが長い耳、ケットシーが私みたいな猫耳猫尻尾、ライカンスロップがルーのような犬耳犬尻尾、んでハーデスは……」

と言葉を区切りながらリンさんが振り返り、後ろ歩きしつつ、小指と薬指のみ立てていた手で俺を指差し。

「あなたみたいに特にこれといった特徴がない」

ちなみにリンさんがルーカスさんを例に犬耳犬尻尾と言った直後、無然として「俺のは狼の耳と尻尾だ」と主張していたが、リンさんは軽くスルー（苦笑）なんかこの二人の力関係が完全に見えてきた

なあ……

リンさんが再び前に向き直るのを見ながら、俺は今の部族名とその特徴を忘れないよう、頭に叩き入れた。

ハーデスつてのは1部族の名前だったんだな……しかも外見的特徴に俺が当てはまるわけか……

一瞬、ルーカスさんを見る。

「それぞれの部族は【始まりの七神】が生み出したと言われている、それぞれの神像が祀られている神殿を守るように都市を築き、そこを首都として、国を挙げて守護しているってわけ。そしてその国の首長こそが世界政府の1幹部となるわけね。ここまでではわかった？」

どうっすかなあ……これ聞いたらまためんどくさいことになりそうなんだよなあ……まあーでも……今さらか……

「あ、あのおう……【始まりの七神】とは？」

二人とも今絶対肩をピクツってさせた！！絶対今ピクツってした！！……うう……いたたまれないよう……この時の極度のストレスがのちに俺の頭髪へ多大なるダメージを……ってなるかああああ（血涙）

「はあ……ええーつと……【始まりの七神】つてのはね、この世界が生まれたのと同時に顕現されたと言われている存在よ。そして、それぞれの神々はそれぞれの部族を生み、世界の運営を任せたと言われているわ。具体的に言つと

光の神はエルフ  
アマテラス

闇の神はハーデス  
ツクニミ

雷の神はライカンスロープ  
ミカツチ

風の神はケツトシー ミナカタ

火の神はドラグーン カゲツチ

地の神はドワーフ イザナミ

水の神はウンディーネ イツキ

といった具合よ。まあー運営どころか、神々がその身を神像へ宿らせ、世界への干渉をされなくなった当初は、全部族で世界大戦とかおっばじめたらしくって、グダグダだったみたいだね（苦笑）」

両肩を持ち上げ、両手を広げたポーズをしながら呆れてるリンさん。

まあー肌やら目の色は違うけど、同じ「人間」しかいないのに、世界大戦起こしてしまってるトコからやってきた俺としては、なんとも言えない心境だ（苦笑）

しかし神が実際に存在したとされてるってことなのか？さっきは神像を祀った神殿を中心に都市が作られているみたいなのを言ってたし、その辺はやっぱり聞いたのかなきゃな。

「神々がその身を宿したとされてる像ってのはやっぱりすごく大切なものなんでしょーね？」

「そりゃーね。各部族の象徴なわけだし、神術を使うには、神像から加護を得なきゃならないわけだから必死よ。」

実際、大昔には戦争を見かねた神々が誰にも加護を授けなくなり、元々加護を得ていた人からも剥奪しちゃったから大混乱になったらしいしね。それで自分達の過ちを省みた各部族の首長達が戦争を最終させて、世界政府を作り、永遠の講和を神々に約束してやっと許してもらったらしいわ」

出たな「しんじゅつ」、この場合、神の術で神術とでも言うのかな

……とにかくきちつと情報収集しないと

「戦争を止めちゃうほどの混乱って想像がつかないですね……神像の加護がないとまったく神術は使えないんですか？」

「まあー大昔とはいえ、やっぱり生活の要所要所に神術は関わっていたし、戦場ではもちろんのこと、魔獣への大きな戦力にもなっていたわけだしね。」

そりゃもう大混乱よ（苦笑）今の時代なんてさらに依存してる部分があるから、絶対に加護を失うようなことはできないわね。

んで、今の話からもわかる通り、加護なしで神術を発動することは絶対に不可能よ」

リンさんは歩きながら後ろの俺に見えるように手を揺らす。

「神像から授かる加護って大切なんですね」

知った風な口でしみじみ言ってみる。

「まあーね（苦笑）いきなり神術が使えなくなることに世界中の人が怯えてるくらいには大切ね」

そりゃまあそうだよなあ……便利なものに弱いのはこの世界の人達も一緒ってことか。

にしても、神様が実際に居て、力を与えてくれる世界か……ますますファンタジーだな（苦笑）

んで、やっぱりどうみても神術ぐらいしか今のところ世界間移動に影響を及ぼしそうなものはないよなあ……まあーまずは生きていくこ

とからだから最初は後回しになっちゃうだろうけど、少しずつでも神術や神について調べていくのがよさそうだな。

「ちなみに人のある場所からある場所へ瞬時に移動させる術とかあります？」

俺の質問に首を傾げるリンさん。

「うーん……そういう術の研究を誰かがしてるかもしれないけど、実用化されたって話を私は聞いたことないなあ……何？あんたもしかして、そんなトンデモな術に心当たりでもあるわけ？」

後ろに目配せしてきたリンさんの目が結構鋭くちょい怖い

「いやいや、もしあったらいいなあーとかなんとなく思っただけですよ〜」

「ふ〜ん……あんまりそういうことは私達以外の前では言わないことね。ただでさえ、怪しいんだからあんな」

「ういっす……肝に銘じておきまっす」

冷や汗を滲ませつつ、気持ち前傾姿勢でトボトボ歩く俺……癒しがほしいなあ（涙）

## 11 (前書き)

こんな未熟な作品を読んでくださる方々に熱く御礼申し上げます。  
大変励みになっております。

昨日の午前中に投稿した10話ですが、午後に多少ですが、編集し直しました。申し訳ございません。

心がズタボロになるのを構わず、必要そうな情報集めを断行した結果、死にたく……

いやいや！ついさっき生き残るって誓ったばかりじゃないか……が  
んばれ俺！負けるな俺！！

まあーとりあえずはLv1の勇者がこれから旅に出るくらいには情報が集まったと思う。

ぼんやりとだが、村に着いて、この2人と別れた後もなんとか1人でやっていけそうだなあと、寂しさを感じながらも考えられるようになった。

結局、かなりの恩人と化したなあ……この2人。いつか恩返しでもできたらいいけど……

そんな日本人らしい奥ゆかしい思いを俺が胸に抱き始めた頃

「ん？なんだ？」

晴れた日の爽やかな草原には似つかわしい、ドロドロとした殺気を放った何かが後方から近づいて来るのを感じる。

俺がそれを察知し、立ち止まって後ろを振り返ると。

「あら、あんたも気付いたの？まだ結構遠くにいるのに大したもんじゃない。」

武術の心得があるってのは嘘じゃなかったのね」

首だけ後ろに向けると、リンさんもルーカスさんもこちらを向いてその何かが来る方向を眺めていた。

「リン、どうする？」

「ルーはどうしたい？」

「ゴブリンの集団だな……今の状態で、この数を相手にするのは、なかなか骨が折れそうだ」

「そうねえ……でもここで放置して村でも襲われたら、結構笑えない被害が出ちゃうだろうし……それに狙いは私達かもしれないしね。いずれにしても戦うしかないんじゃないかしら」

暢気な……

この場面でさっきまでと同じペースと雰囲気じゃやる2人に俺は呆れていた……

なんせどんどん濃くなるこの殺気は、間違いなくこちらに向かって来ていて、俺達は確実に襲われる側なのだ。

蹂躪を目的とした、剥き出しに放出されているソレを浴び続けながら、あの落ち着きっぷりはさすがAクラスってことなのだろうか。

ってかなんでまだ見えてもいないのに相手が何者が判別できてんだよ……ゴブリン？

それってファンタジーもので定番のあいつらか？

もし俺の想像が当たってれば、森で襲ってきた奴らのことな気がする。

んで、もしそうなら俺も戦える。

ゴブリンについて詳しく聞いておくべきだな。

そう思い、俺は2人の方へ振り返る。

つて……え？……ま、まさか……いやいや……つまりこれがAクラ  
ス冒険者の実力ということだろう……

2人が話している様子はいたって普通だ。

ひっきりなしにピクピク動いている耳を除けば……

さ、触りたい尻尾もさることながら、あのピクピクしてるの触って  
みたい！！

うおおおお……今は我慢だ……そんな場合じゃないしな。絶対怒ら  
れるし。

だがまあ……いつか必ずこの野望は叶えることを誓うぜ……熱く萌  
ゆるこの胸につっつ！！！！

俺が1人で悶え苦しんでいると

「こいつはどうするんだ？足手まといのお守りなんて俺はごめんだぞ？」

とルーカスさんが俺を見て言う。

この人に関しては実はいい人なのがすでにバレているので、もうイラッとすることがない。今の言葉だって、俺のことを心配していると取れくないし……たぶん

「もー、ルーもそこまで意固地になることないじゃない……」

まあーでもそうね、多少戦えるようだけど、この数を相手するのはきついだろうし、先に村に向かってもらおうかな？このことを伝えて、援軍を呼んできてほしいし」

あー、このパターンかあ……でも個人的にはここでこの世界の「戦闘」ってやつを見ておきたいんだよなあ……神術だっってどういう感じなのか気になるし。

それに、この恩人2人を置いて俺だけ安全な場所にいるってのはやっぱり男として納得できない。

ちよつとだけ粘ってみるかな……それでもダメなら諦めよう。

粘りすぎて行動が遅くならないようにしなきゃな。

「あー、数はどのくらいなんですか？」

リンさんは自分の提案に質問で返されたことを多少訝しんだが、答えてくれた。

「ん？うーん……まあー大体7〜80つとこかしらね」

「リンさんとルーカスさんはAクラス冒険者ですよ？お二人でもその数はきついんですか？」

と言った瞬間、「ヒュッ」と槍の穂先が顔の目の前まで飛んできた。

「調子にのるなよハーデス野郎。お前がいなければ、あの程度の雑魚が何匹居ようと蹴散らせる」

それはつまり俺のことを心配してるってことなんですけど……憎めないなあ（苦笑）

それにハーデス野郎って悪口として成立しなくね？

と思いつつも、ルーカスさんの目を見ながら俺は訴える。

「なら、俺に気を使うことなんてありません。心配してくれるのはありがたいけど、恩人2人を置いて俺だけ逃げるなんてできません！もし俺がここで死んだとしても、それは俺の責任です！足手まといにはなりません！俺も戦わせてください！！」

言いながら、頭を下げる。

「ふう〜ん……」

とはリンさん

ルーカスさんは無言だが、槍は引き戻してくれた。

「ルー、どうする？」

ルーカスさんは歩き出し、俺の横を通り過ぎる。

「ふん、好きにしろ、だがもしお前が奴らに殺されそうになっても、俺は助けないからな」

通り抜け様にそう言うってくる。

「もー、素直じゃないなあ……まあーそういうことらしいから、わざわざ死ぬかもしれない場所に留まりたいなら好きにすればいいわ。でも、戦うのなら、必ず生き残りなさい？こんなところで死なれたら、後味悪くて腹立つし」

とリンさんも歩き出し、通り抜け様に、俺の肩に手を置いて、そう話しかけてくれた。

そんな2人の背中に向かって

「ありがとうございます！」

と声をかけ、後を追う。

## 12 (前書き)

未熟すぎる作品ですが、よろしくお願ひします。

目の前に広がるゴブリンの群れが、1つの塊のように殺気を向けてこちらに近づいて来る光景は、今まで見たどんなにグロイモノよりも鳥肌が立つのを覚えた。

「おーおー血走った目しちゃって、ただでさえ不細工なツラしてなのに、勘弁してほしいわー」

右手のひらを顔の前で水平にかざして、眺めてるリンさんは相変わらず暢気だ……

「ゴブリン単一の集団か……1つの巢にいた群れがまるまる移動してるのか？」

ルーカスさんは冷静に考察を始めた。

「あー、もう結構目と鼻の先まで来てるんですが、なんか作戦的なものってあるんですか？」

俺が尋ねると、リンさんが

「うーん、そうねえ……って言っても、私達、今結構消耗してて、でかい術使えないのよね。特に私は（苦笑）だからまあ中つくりのをまずルーがぶつけたら、ひたすら各個撃破しかないのよね（笑）ファイト！！」

と俺に親指をグツと立てた左手を見せ、笑顔で話すリンさん。

それ作戦って言わねーし！！ってかそれを2人でやるうとしてたわ

け？どんだけだよ！！

まあーいいや、幸い、ゴブリンは森で遭遇したあいつらのことだったから、3人でカバーしあいながら戦えば、かなり数は減らせるだろう。

足手まといにはならないよう気を付けるしかないな。

「ま、まあーできるだけがんばりまっす……………」

頂垂れつつ返答する。

「んじゃそろそろ行きますかー。ルー、とりあえず一発よろしくねん！！」

リンさんがルーカスさんの肩をポンと叩くと、ルーカスさんが右手に持った槍を脇で挟むように引き、半身になる。そして左手をゴブリンの群れへかざすと…………

パツと光がその手の平から放たれ…………

ズガアアアアアン

という雷鳴と共に一筋の稲妻がゴブリンの群れを襲った。

いやいや、あれで中つくらいかよ！！一撃で10〜15体くらい黒焦げになってんじゃねえか…………自然災害が襲ってくるとか、神術マジパねえっす…………

「み、耳が……………」

俺が両手で左右の耳を押さえつつ、そうこぼしていると

「んじゃ！おっ先〜」

とリンさんが短剣を2本、逆手に持って突撃していった。

それを追って、ルーカスさんも両手で槍を持ち直しながら駆ける。

いやいや……え？……マジで各個撃破でいくの？お互いカバーとか  
しあわないのかよおおおおお（涙）

なんてね……まあーなんか薄々わかってましたよ。

だってそのへんの打ち合わせ全然なかったし、ルーカスさんに至っ  
ては「助けないからな宣言」されてますしね……ホントは俺のこと  
好きなくせにさ……

ヒュウ……バチン！！

足元に雷撃らしきものが弾ける。

「うおわっつ！！あぶなああ！！？」

何してくれてんのあの人！？流れ弾？流れ弾だよね！？

思わずルーカスさんの姿を探す。

うはあ……なんだあれ……やっぱめっちゃ強いんだなあ……あの2人、  
リアル無双乱舞じゃん……

ルーカスさんは槍を手足のように操ってゴブリンを蹴散らし、リン

さんは短刀の二刀流で踊るようにゴブリンの首を飛ばしている。

あれで本気じゃないんだよなあ……しかも神術まで駆使されたらもう最強じゃないか（苦笑）

とか感心しながら戦闘を観察していると、討ち漏らしが俺の方へ向かって走ってくるのが見えた。

「そろそろ出番ですか……昨日の夜よりもさすがに数が多いし、油断もしてない敵だ……こっちもこっちでしっかり気合い入れしないと」

「ふうふうふう……」

心を平静に……五感を鋭敏に……俺の意識がこの場を支配するよう……

気合いを充実させていく。

身体の隅々まで力を行き届かせながら、自然体のまま、敵の攻撃がこちらに届く半歩手前まで、その場を動かない。

「グギヤーグギヤーグギヤー」

まず正面から棍棒を振り下ろしての一撃が迫る。

それに対し、右足を引き半身になることかわす。

敵が前のめりになる勢いを殺さず、相手の右手首を取り、足を掛けながら手首を返し、その場で一回転させ、背中から落とす。

仰向けになった敵の首を思いっきり踏み、首を折る。

右、左、正面の3方向からそれぞれ剣を持ったゴブリンが突きを仕掛けてくる。

前方宙返りをしながら避け、そのまま正面の奴の登頂部へ踵を落とす。

着地後素早く左手にいる奴に右足による上段蹴りを放ち、頸椎を破壊。

最後に残った奴を倒そうとした時、ナイフを持った新手が俺の背後を襲う。

身体を半歩左にずらしながら、背後にせまった刺突をかわし、相手のナイフを持つ右手首を左手で取る。

そのまま一本背負いをし、相手の背中を地面に叩きつけると同時に喉元に拳を叩きつけて潰す。

横風ぎの剣が目の前に迫り、上半身を反らすことで避ける。

そのまま後転飛びをし、立ち上がる。袈裟斬りの剣、槍による突き、棍棒による打撃と次々と攻撃が迫ってくる中、避けて打ち込む、いなしで投げる、投げながら打つといった具合に対処していく。

集中を切らさず、周りの動きを支配し、自分がもつとも効率よく動く。

これだけ感情的で直線的な攻撃なら、例え多対一でもそこまで手こずることはない。

それにやはりといった感じだが、俺の身体能力がちょっとだけ底上げされている。

そんなぶつたまげるほど上がってるわけじゃないのだが、普段ならいくら敵の態勢を崩していたり、相手の攻撃する力を利用しているとはいえ、止めをほぼ一撃で決められるってことはない。

本来ならもう2、3発入れるか、首を絞めたり折ったり、頭を地面に叩きつけたりしないと絶命まではさせられない。

だが、今も、敵の刺突をかわし、相手がこちらに来る勢いを殺さずに腹に貫き手を一発打ち込んだだけで、内臓を潰した感触がした。

まあー結果的にはありがたいので、いいんだが……

これに頼ったらこの先強くなれないよなあ……やっぱり心身ともに鍛練が必要だな……

俺はそう固く決意し、次の敵を倒しにかかる。

### 13 (前書き)

未熟すぎる作品ですが、よろしく願います。

突いてきた槍の穂先を避け、引き戻せないように柄の上部を左の脇と、手で取る。

すかさず身体を右に移しながら小内刈りを掛ける。

相手が背中から地面に倒れたと同時に拳を首に叩き込む。

「ゲゲツ」という悲鳴を最後にそいつは絶命した。

「さて、こっちは大体片付いたけど……」  
と額の汗を拭いながら、2人の方を見る

当たり前だが、無事に向こうも終わったようで、すでに短剣を腰の後ろにある鞘に納めたリンさんと、右手で持っている槍の上部を肩に寄りかけさせている、ルーカスさんがこちらに歩いてくる。

うーん、歴戦の戦士2人つて感じだなあ……

「ふ、ふーんだ！術さえ使えてれば私の方が討伐数多かったんだからね！白兵戦だけなら私のが2体多いんだし」

「どう言い訳してもいいが、最終的な討伐数は俺が38でリンが27なのには変わりないぞ？」

勝ち誇った顔をしているルーカスさんと、「ぬう〜」と悔しそうなリンさんのそんな会話が聞こえなければ、ホント完璧だったのになあ……（苦笑）

そんな微笑ましい（？）光景を戦闘が終わった脱力感と穏やかな気分に分りながら見ていると、フと言いきれない違和感に襲われる。

どこからか見られているような……粘っこい視線のようなものを感じる。

不安におそわれ、抜いていた気と力を戻す。

周りを警戒し、すぐに動けるようにしておく。

俺が今だ戦闘態勢を解かず、キョロキョロしているのを不思議に思ったのか、リンさんが歩きながら話しかけてくる。

「おーい！どしたんだよー？」

「油断大敵」

この言葉をこれほど痛感するのは、後にも先にもこの時だけだろう。少しは考えるべきだったのだ、そもそもなんでこんなところで大量のゴブリンが現れたのか。

あいつらは村を襲うために現れた？

あいつらの目的は俺たちだった？

両方とも何の確証もないのに、なんとなくどちらかだろうと決めつけていた。

なんで考えなかったんだろうか？

そう、あいつらはこいつから逃げて来たんだ。

そいつは待っていたんだ、ゴブリンに気を取られ、他への警戒が薄れるのを……

息を潜め……気配を隠し……確実に狩りを成功させるために……

ブワッ！！！

っと殺気が膨れ上がる。

気が付いたら、そいつはリンさんとルーカスさんの背後に立っていた。

右目と左腕がなく、身体中傷だらけでありながら、筋骨隆々で3mほどあるその体躯が持つ迫力は、まさに怪物といった感じだ。

右手に持つ巨大な斧は、柄も刃もボロボロでありながら、振り降ろされれば、ミンチになるのは確定だ。

そして、そんなシロモノが今まさにルーカスさんとリンさんに向けられているのである。

「助けなきや……」

そう思った。それしか思わなかった

だから走った。

周りの風景がスローモーションになる。

怪物と2人がいるところまで大体15mくらいだが、遠く感じてし

まう。

奴は、体を左に引き絞り、そのまま横一線に斧を薙ぎ払う。  
右手一本の一撃なのにも関わらず、その威力は2人をまとめて真っ  
二つにできそうなものだった。

その一撃が放たれた頃に、2人はやっと振り向き、自分達の置かれ  
ている状況を把握していた。

だが、もはや全てが遅い。

今から動いたとして、避けることも、迎撃することも不可能だ。

2人もそう悟ったのか、自分の死を覚悟したかのように身体の力を  
抜いた。

「そうはさせねえよ……」

俺は2人の肩を両手でそれぞれ掴む。

2人の間に滑り込みながら2人を後方へ吹き飛ばすつもりで思いつ  
きり後ろへ引く。

「え……？」

という声が聞こえたような気がした。

強烈な右からの衝撃に吹き飛ばされながら

「今回は最初から諦めずに動くことができたなあ……」  
と頭の片隅で考えていた。

「えっ……」

身体が後ろへ浮くのを感じながら、私は目の前で起こっていることが信じられなかった。

グシャツツツツツ！！！！

という音が聞こえ、彼は左方へ吹き飛ばされる。

ザシャアアア……ゴロゴロゴロ……

元々みすばらしい格好だった彼が、さらにボロ雑巾のようになる。

尻餅を着く格好で地面に着地した私は、その後ピクリとも動かない彼を見て、やっと思考が動き始めた。

「な、なんで？」

わからなかった。なぜ彼がこんなことをしたのか。

なんせ彼とはついさっき会ったばかりだ。

血の匂いをさせ、やたら軽装な出で立ちで現れた彼。

記憶喪失だと言い、常識中の常識を聞いてくる彼。

見たこともない戦い方をし、素手でゴブリンの集団を圧倒する彼。

非常に胡散臭い存在だ。誰がどう見ても怪しい。

だから心を許すようなことはなかった。  
常に警戒を促していたし、釘も何度か打っておいた。  
もし、彼がいることで私達が不利になるようなことがあれば、簡単に見捨てることになっただろう。

なのに……なのにだ!!

どうして……彼があそこで転がっているのよ!!

村までの同行を許したのは、単なる気まぐれだし。

質問に答えたのだった。ただの暇潰し。

ゴブリンとの戦いで逃げるように言ったのだから、依頼を終えたばかりで、私達が消耗してるから足手まといはごめんだっただけ。

あなたに命を助けてもらう義理なんてない!!

それも、戦いの中で油断し、命まで諦めた私が助かって、あなたが死ぬなんて間違ってるじゃない!!

自分を責める思考の闇に捕らわれる……

「立てっ！リンー!!」

ハッと顔をあげ、すぐに左を見ると、すでに立ち上がり戦闘態勢に入っているルーが居た。

「まだ何も終わってないぞ!!それに、あいつはまだ生きている」

「……………えっ？」

一瞬、ルーが何を言っているかわからなかったが、すぐに悟り、急いで彼に対して五感を集中させる。

「ぐ……………がはっ……………はぁはぁ……………」

わずかだが息づかいが聞こえる……………

だけど心音が弱まってきていて、早く治療術をかけなければ危ない！

ヒュツツツ！！

風切り音が耳を襲う

隙だらけになっていた私に大斧が振り落とされたのだ。

ガキーン！！

思わず瞑ってしまった目を開けると、ルーがそれを受け止めてくれていた。

「ぐっ……………そろそろ目を覚ませ！！助けられるものも助けられないぞー！！」

ここまで来てやっと、自分がどれだけふぬけていたかに気づく。

「そうね……………絶対助けてみせる……………」

立ち上がり、二本の愛刀を鞘から抜き、構える。

絶対に死なせない！！

「ルー、ごめん……ありがと……それじゃいくわよっ……！」

「ルー、ごめん……ありがと……それじゃいくわよっ……！」

「応ッッ……！」

俺は鏝競り合いを崩すべく、全力で相手の斧を押し弾く

ガギイン……！

瞬発的な力に押され、敵が後ろにたたらを踏む。

そこへ間髪入れずに敵の懐へリンが飛び込む。

左の膝へ斬撃を叩き込もうとするが、敵もこの攻撃を読んでいたよ  
うで、さらに後ろへ飛んでそれを避けた。

攻撃が失敗すると、リンもすかさず俺の横へバックステップで戻っ  
てくる

「さすがに何度も見せてるだけに、避けられるわね」

「ああ」

そう、奴と対峙したのはこれが初めてではない。

なんせ、今回の依頼で討伐対象となっていた魔獣の一体なのだから。

個体名「ブラック・オーガ」

こいつが頭目になり、オーガ12体を率いて近隣の村や街、行商中の商人が多大な被害を受けていたのだ。

俺達はギルドで奴らの討伐依頼を受け、寝床にしているというスプリガンの森へ向かった。

戦いはかなりの激戦となった。

元々、Bクラス相当のオーガが12体、Aクラス相当のブラック・オーガが1体というAクラスクエストの中でも高難度の依頼だ。

そのため、ある程度の手強さは予想できていたのだが、その予想を遥かに上回るモノだった。

統率のとれたオーガの集団、それを巧みに操るブラック・オーガ。俺とリンが12体のオーガを倒した頃には、すでにかんりの消耗を負っていた。

ブラック・オーガとの決戦には、俺もリンもそれこそ決死の覚悟の下で戦った。

奴の右目と左腕を奪い、致命傷に近い傷も幾つか負わせた。

後はトドメのみとなったとき、追い詰められた奴は何を考えたのか、みずから谷底に落ちたのだ。

なぜそんな行動に出たのかは、全くわからなかったが、俺とリンはすでにあれほどの手傷を負った奴がまさか谷底に落ちて生き残れるはずがないと思い、帰還してしまったのだ。

そして、その結末がこれだ……

槍を持つ手に力が入る。

標的の死を確認せず見逃す。

勝利したことに満身し、戦場で油断する。

どちらも俺の失態だ。

なのにそれを犯した俺が五体満足で、あいつは俺の命を救い、みずからが瀕死の状態になっている。

本来なら、逆でなければならぬはずだ!!

これで例えブラック・オーガを倒せたとしても、あいつが死ねば、俺は自分を絶対に許せないだろう。

必ず……必ずあいつは死なせない!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5412z/>

---

異世界でベタに生きる

2011年12月26日01時50分発行